

# 日本ストレス学会第33回学術総会・市民公開講座

2017年10月21日(土)午後1時～2時半

## もう一つの子ども家族支援：

## 対人関係トレーニングで出会う人々を準拠枠にして

講師：畠中宗一先生

**略歴**：1951年 鹿児島市生まれ。鹿児島大学、立教大学大学院社会学研究科、筑波大学大学院社会科学研究科を経て、沖縄キリスト教短期大学、中国短期大学、東洋大学、大阪市立大学を経て、2015年4月から関西福祉科学大学教授（大学院社会福祉学研究科長・図書館長・学長補佐）。大阪市立大学名誉教授。大阪市立大学博士（学術）。

**学会活動**：日本家族社会学会、日本社会病理学会、日本精神保健社会学会、日本家族心理学会の理事及び機関誌編集委員長を歴任。現在、日本精神保健社会学会理事・副会長。日本家族心理学会・機関誌編集委員。日本社会病理学会・学術奨励賞選考委員、他。

**社会的活動**：日本IPR研究会代表。公益財団法人ひと・健康・未来研究財団理事。同財団機関誌『ひと・健康・未来』編集委員、他。

**主な著書**：子ども家族支援の社会学、家族臨床の社会学、家族支援論：なぜ家族は支援を必要とするか、情緒的自立の社会学（以上、世界思想社）、子ども家族福祉論・序説、チャイルドマインディング（以上、高文堂）、富裕化社会に、なぜ対人関係トレーニングが必要か：自己への関心から他者への誠実な関心へ（ぎょうせい）。



**主な編著**：自立と甘えの社会学（世界思想社）、社会病理学講座第4巻・社会病理学と臨床社会学：臨床と社会学的研究のブリッジング（学文社）、老人ケアのなかの家族支援：各専門職の役割とコラボレーション（ミネルヴァ書房）、臨床社会学の展開、家庭的保育のすすめ、抵抗体としての家族、子どものウェルビーイング、対人関係の再発見、対人関係トレーニング、関係性のなかでの自立（以上現代のエスプリ）など多数

社会福祉の領域における子ども家族支援は、各種の行政施策で対応されることが一般的です。例えば、保育を必要とする家庭に対する保育政策は、保育ニーズに対する需要と供給という枠組みのなかで展開されます。保育所を利用する人々は、サービスの授受関係として認識します。行政も利用者もサービスの授受関係の枠組みで保育所を認識すると、子どもの育ちに関する視点が欠落しがちです。子ども家族支援は、サービスの授受関係という認識から、親子がきちんと向き合うための環境を調整するという認識も必要ではないでしょうか。保育所に子どもを迎えに行き、担当の保育士さんから子どもの一日の様子を聴く。帰宅し、今日は、・・・だったんだね、と保育士から聴いた話を素材に子どもと対話する。保育所の力を借りて家庭と共同で子育てをする。この認識が、とりわけ親に必要だと思っています。共同で子育てをしているという認識が、土日の行事にも肯定的に対応することができます。サービスの授受関係としての認識は、サービスを貨幣で買い取るというやり方でもあれば、土日は休みたいとなるのではないのでしょうか。ここでは、子ども家族支援は、労働政策としての意味に比重が置かれ、子どもの育ちへの配慮が後退しているように思います。

本講演では、親子がきちんと向き合うための環境の調整として、もう一つの子ども家族支援という表現を採用しています。また親子がきちんと向き合うということ、日本IPR研究会が主催するIPR（対人関係）トレーニングで出会う人々を準拠枠にします。IPRトレーニングは、Tグループの形式を取り、メンバー相互の独自性の相互受容を目標にします。このトレーニングのエッセンスは、見ること、聴くこと、感じること、応答すること、これらをいまここで、に尽きます。このトレーニングで出会った人々を準拠枠にして、メンバーが相互に関心を持って向き合うこと、その結果として、関係性に気づき、関係性を生きることを可能にします。もう一つの子ども家族支援は、関係性を生きる力を育てることに繋がっていきます。今日の子ども家族問題は、客体としての個々の問題状況の改善に加えて、主体の側の関係性を生きる力を育てることで、より効果的な子ども家族支援に繋がっていくのではないのでしょうか。



参加費  
無料

学校法人玉手山学園 関西福祉科学大学

〒582-0026 大阪府柏原市旭ヶ丘3-11-1

～創立20周年記念事業認定～

